

今回は、昨年9月に行われたキャンベラ奈良・キャンドルフェスティバルと日本音楽シンポジウムを話題を中心に、オーストラリアはキャンベラにおける日本文化の受容の状況について報告したい。

1901年、オーストラリアがイギリスから独立し、連邦結成の最大の難関になったのは、どこに連邦の首都を置くかという問題だった。二大都市のシドニーとメルボルンが互いに譲らず、1911年、この首都争いに決着を付けるべく、両都市の間に直線を引いたほぼ中間地点である何もない牧草地に新都が置かれることになった。アボリジニの言葉で「集会の場所」という意味のキャンベラである。街は1913年から1960年にかけて人工的に設計され、バーリー・グリフィン湖を挟み、政府機関が置かれている行政地区とショッピングセンターや大学が集まる商業地区に分かれている。

1993年、キャンベラは奈良市と姉妹都市提携を行った。両市の交流のきっかけを作ったのは、戦後、奈良市で貧困に苦しむ人々の救済に尽力し、日豪友好の礎を築いたトニー・グリーン神父だった。神父を敬愛する奈良市民たちの力で製作されたドキュメンタリー映画『豪日に架ける一愛の鉄道』は、キャンベラをはじめ、豪州各地で上映されたという。奈良市が古都であるのに対し、キャンベラは新都である。一方で両都市には、ほぼ同じ人口であることや、都市部からすぐに自然にアクセスできること、動物(カンガルー・鹿)が身近な公園内で見られることなど、共通点が多くある。1999年、キャンベラ奈良平和公園(Canberra-Nara Peace Park)が奈良市民の寄付によって建設された。美しい日本庭園と湖の景色を楽しめる場として多くの人に親しまれている。

2004年より、この公園では、姉妹都市としての友好関係を祝うために「キャンベラ奈良・キャンドルフェスティバル」(一般に「ナラ・フェスティバル」と呼んでいる)が開催されている。キャンベラは、現在奈良市の他にも姉妹都市協定を結んでいるが、このように友好関係を祝うイベントは他にはない。また、オーストラリアの首都であるところから日本大使館の協力も得やすく、フェスティバル当日には、特命全権大使が招かれている。

去年は、奈良の平城遷都1300年の記念の年であり、キャンベラの設立100周年(2013年)の先行行事としても、この度のナラ・フェスティバルは盛り上がりを見せた。公園全体に日本料理とオーストラリア料理の屋台や折り紙、習字、もちつきなどの参加型企画が並ぶ中、ステージ上では様々な演奏が行われた。作曲家マリー・フィンスター女史の監修・指揮による「生きている楽器:古事記の世界」では、尺八、笙、箏、ハープ、チェロ、フルートの伴奏で子供から大学生までが「黒田節」、「こぎりこ節」、「桜」などの日本歌謡を歌った。これには、日本大使館より借用した羽織袴を着て私も参加した。他にも、研修旅行として訪れていた奈良大学附属高等学校生によるコーラス、北海あほんだら会シドニー支部によるYOSAKOI踊り、アボリジニによる伝統舞踊などが演じられた。花冷えのする中、最後に、ボランティアのキャンベラ市民によって公園内の石畳の上に置かれた約2,000個の灯籠への点火が行われた。まさに奈良の「燈

火会」のうつしであり、このお祭りの名称の由来でもある。

ナラ・フェスティバルの翌週には、キャンベラ設立100周年祭実行委員会とオーストラリア国立大学音楽学部との共催による「大学院生セミナー:日本音楽シンポジウム」が開催された。発表者は、日本音楽専攻の大学院生である。このシンポジウムには、たまたまキャンベラにおける「よふきぐらし講座」の打ち合わせ等で来られていた海外部北米オセアニア課一瀬孝治課長とオセアニア出張所足立正文所長も出席された。

ナラ・フェスティバルで「生きている楽器:古事記の世界」に関連し、「奈良における雅楽の歴史」として私が初めてを発表をした。この題の「奈良」には、時代区分としての「奈良時代」と、地理的空間としての「奈良市、奈良県」という意味を持たせている。「古事記」に記される雅楽の源流をはじめ、奈良興福寺南都楽所の歴史、また、明治以降、天理教が祭儀に雅楽を採用して以来、宗教音楽としてだけではなく芸術音楽としても研鑽する雅楽団体を世界に排出してきたことを説明した。なかでも平城京遷都1300年で天理大学雅楽部が伎楽を演じているテレビコマーシャルをオーストラリア国立大学の学生は興味深く見ていた。雅楽器の実演を行った後、実行委員として出席していたオーストラリアで著名な声楽家ロビン・アーチャー女史は、天理の雅楽に強い関心を持ったようである。

次に、コルネリア・ドラグスィン女史は、「天理教の音楽」のテーマで発表した。女史は、これまで天理におけるフィールドワークを行っており、今回の発表では、「みかぐらうた」に現れる農業用語を中心に、具体的な農作業の動作(手振り)と宗教的含蓄との関連について述べた。「おてふり」の実演と討論には、一瀬課長と足立所長も加わり、参加者の大きな反響を呼んだ。この他、小笠原諸島の音楽の発表もあり、「日本音楽シンポジウム」は幕を閉じた。

キャンベラでは、この種の催しとして、昨年で33回目を数えた「日本の夕べ」(オーストラリア国立大学アジア太平洋カレッジ日本センターと日本大使館の共催)がある。そこでは「歌舞伎」が演じられることで知られている。当初、催し物としては、現代劇の公演としてスタートしたが、1980年代より歌舞伎を演じるようになった。演じるオーストラリア国立大学「ザ・歌舞伎」倶楽部は、海外における歌舞伎を演ずる団体としてもっとも長い歴史を誇っている。「日本の夕べ」は、キャンベラ市民が、日本伝統芸能の一端を垣間見られる機会であり、日本語を教えている初等・中等及び他の高等教育機関との交流を深める場にもなっている。なかでも「ザ・歌舞伎」は、日本語と英語、和洋折衷の喜劇で観客を沸かせ、キャンベラに受け入れられた日本文化の一つの象徴ともいえる。

[参考資料]

- ・ ACT Government Chief Minister's Department: Canberra Nara Candle Festival: <http://www.city.nara.nara.jp/www/contents/1147416622438/files/candlefestival.pdf>
- ・ 奈良市役所: <http://www.city.nara.nara.jp/icity/browser?ActionCode=content&ContentID=1147416622438&SiteID=0>
- ・ Radio National (1999) Japan Stories: Love and War: <http://www.abc.net.au/rn/relig/spirit/stories/s69405.htm>